

# わが青森紀行

結城登美雄

□□2□□

古代、大和(奈良)は「国のまほろば」である  
と称された。「まほろば」とは国々の中で最もよいところ、というほどの意味であるが、これに対して「北のまほろば」はどこにあるか訪ね歩いた司馬遷太郎氏は、それは青森県であると言いつつた。ならば、現代日本において「食のまほろば」はどこかと問われたら、私は躊躇(ちゆうちよ)なく、青森県であると答える。

## 本県は「食のまほろば」

良く生産されていることだ。この二つの条件を併せ持つ県はほかにはない。

ついに食料の国内自給率が40%を切ってしまった日本(〇六年度)。中国、インドなど巨大な胃袋を持つ国が食料の輸入国に転じ、世界が食料争奪戦を繰り広げる中、いつまで日本は海外に食料依存していられるのか。自給率39%の現実には国民が不安をかこち、農政がうるたえ、食料関係者が

# 自給率・バランス良し

※「わが青森紀行」は原則として隔週日曜日に掲載します。

対応に苦慮する中で、青森県は百四十万人口の食料を補って、なお余力ある「食のまほろば」である。

青森県の人々が身近に食が豊かにある幸せをどう受け止めているかは知らないが、この国では異なる。

例のことに属する。千二百万人の人口を抱える東京の自給率はわずか1%、大阪2%、神奈川3%。わが百万都市仙台は6%にすぎない。要するに都市とは日本国同様、他国に食料を依存する危うさの上に成り立っている。

だが、青森県の食の豊かさは自給率の高さだけではない。確かに四十七都道府県中、自前で食料を完全に賄えるのは、青森のほかでは北海道、秋田、山形、岩手の四道県のみ。しかし141%の

和田湖、小川原湖。青森県は有数の内水面漁業基地である。私はこれまで何度となく十三湖や小川原湖のシジミ漁やワカサギ漁を取材させてもらった。

太宰治は「津軽」で十三湖を「人に捨てられた孤独の水たまり」と呼んだ。感傷的な旅人にはそう映るのかもしれないが、早朝に現場に行けば、多くの漁師たちが汗を流す暮らしの湖であり、魚介類の宝庫であることが分かる。しかも人々は魚介類を捕り過ぎないようにし、持続可能な漁業を営む。漁獲を厳しく制限する資源管理型漁業の先駆地でもある。

水環境、自然環境を気遣いながら今日も体力の限りを尽くして、いそしむ人々がいる青森。それが「食のまほろば」を支えている。労苦が報われることを願わずにはいられない。



十三湖でのシジミ漁。資源管理型漁業の先駆地でもある

県別・品目別自給率(カロリーベース)(2004年度概算値) (単位:%)

県別自給率	米	米を除いた自給率	小麦	大豆(食用)	野菜	果実	牛肉	豚肉	鶏肉	牛乳・乳製品	魚介類	
青森	117	302	60	7	44	246	491	26	21	38	25	292
岩手	106	327	38	10	35	98	74	33	20	97	79	180
宮城	83	263	28	4	67	42	8	17	7	7	29	210
秋田	141	548	17	1	71	84	49	8	15	1	14	15
山形	122	451	22	0	73	117	134	19	10	3	34	11
福島	85	301	19	1	26	97	75	18	8	5	24	54
東北	104	344	30	4	52	107	125	20	12	23	33	136
全国	40	95	23	13	16	77	36	12	5	8	28	55

資料:農林水産省「食料自給率レポート」を基に東北農政局で試算

秋田県の自給率は、大半を米が占める。米を除けば、たちまち17%にまで落ちる。

別表の通り、青森県は米、小麦、大豆、野菜、果実、牛肉、豚肉、鶏肉、牛乳・乳製品、魚介類をまんべんなく生産している。こんなにバランスの良い生産力は他県にはない。中でも注目したいのは魚介類生産の高さ。わずか一万人の漁民が百二十九の漁港で二十七万トンの生産量を支え、魚種も多彩だ。

海だけが生産の現場ではない。湖もまた漁業の拠点である。十三湖、十